

演題 5. 超音波検査でみた頸動脈狭窄
・・・人間ドックスクリーニング結果より

- 木村友子 大石園美（ちば県民保健予防財団
診療部 人間ドック科）角南祐子（同 循環
器科）鈴木公典（同 内科）

1. はじめに

生活習慣の変化に伴い、増加傾向がみられる全身の動脈硬化や脳血管障害の評価のために、血管の非侵襲的かつリアルタイム診断法として頸動脈超音波検査が普及してきた。私達、ちば県民保健予防財団、人間ドック科では、循環器疾患のスクリーニング検査の内容について、従来の動脈硬化評価を目的とした眼底検査や心電図検査のみならず、頸動脈超音波検査を積極的に導入している。今回、人間ドックスクリーニングで実施した頸動脈超音波検査の実態をまとめたので報告する。

2. 対象・方法

対象は、2007年1月から11月までに当財団人間ドック科でスクリーニングとして頸動脈超音波検査を実施した者、406名（男性207名、女性199名）。測定方法は、早期動脈硬化研究会で既報の方法に準拠した。

3. 結果

IMT肥厚を認めた者は、251名（61.8%）、1.1mm以上の隆起性病変（プラーク）を認めた者は、180名（44.3%）、2.0mm以上のプラークが60名（14.8%）にみられた。ECST法による狭窄率50%以上の者は、6名（1.5%）であった。血流速評価が、狭窄・閉塞の診断に有用であった症例を認めた。

3. 考察

スクリーニングにおいても、IMT肥厚、プラーク保有率は4割以上と高率で、狭窄・閉塞病変に関しては血流速評価の併用が重要であると思われた。健診の時間的制約の中で、検査効率、診断能力の向上のために、日々の研鑽が不可欠であると確認した。

043-246-8664 内線 6201